

鉄雲藏龜の五問と卜人

吉池孝一

一

劉鶚(リュウガク。字は鐵雲テツワン)の『鐵雲藏龜』6卷(光緒癸卯(29)年・1903)は、初めて拓本によって甲骨文字を世の中に紹介した書である。そしてその序文において僅かではあるが甲骨文の解読が試みられた。この解読の試みも公にされたものとしては初めてのものである。

さて、卜辞は{干支+「卜」+貞人名+「貞」+問う内容}という形式をもっているが、劉氏は「卜」字と「貞」字の間の文字を占い師(劉氏は卜人と称する)の名とは考えず、「貞」の後の問う内容の中に占い師(卜人)の名を見ていた。その28年後、董作賓氏の「大亀四版考釈」(1931年)に至って占い師(董氏以降、貞人と称される)の名であることが明らかにされたわけである。

ここでは、董氏による貞人の発見が、劉鶚の『鐵雲藏龜』序で言及された卜人と係わりがあるということについて述べる¹。

二

『鐵雲藏龜』の序には「龜板雖皆殘破。幸其卜之繇辭。文本甚簡。往往可得其概。」とある。龜版は皆破損しているけれども、卜辞は内容が簡であり、その概略は知りうるという。そこで、劉鶚によって読まれ漢字楷書に改められた卜辞例を挙げると次のものがある。

- ①「丁酉卜大問角丁亥彤日」(二十二葉第三片)
- ②「庚戌卜哉問雨帝不我□」(三十五葉第三片、□は欠落等を示す)
- ③「庚申卜厭問歸好之子」(百廿七葉。左行)
- ④「辛丑卜厭問兄於母庚」(百廿七葉。右行)
- ⑤「癸子卜厭問虺父卜」(六十七葉第三片)

「卜」と「問」の間に幾つかの文字がある。これらの文字について劉氏は序文で次のように言う。

凡稱問者有四種。曰哉問、曰厭問、曰復問、曰中門。中字作𠄎。

¹ このことについては吉池孝一 2007 で言及したことがある。

哉、厭兩問最多。疑哉爲初問。厭爲再問。故詩曰。「我龜既厭。不我告猶」。言我已再問。而龜不我告也。

「卜」と「問」の間の幾つかの文字は卜問の問い方を示すもので、哉問・厭問・復問・中問の四種があり、そのうち、哉問は“初めて問う”、厭問は“再び問う”であるという。

復問と中問の意味するところは不明である。復問の復については卜辞例も示されないため、如何なる甲骨文字に相当するか序文の記述からは分からず、本文拓本によって推測するしかない。また例①のように大問というものもあるが、これについて卜問の問い方として触れるところがないのは不可解というしかない。いずれにしても劉鶚は卜問における問い方として五種すなわち五問を挙げているのである。

この五種の文字は、その後、董作賓氏の「大亀四版考釈」に至って占い師（貞人）の名であることが分り、甲骨文字の研究は大きく進むことになったわけであるが、貞人名の発見においては、劉鶚が言及した⑤「癸子卜厭問尪父卜」（癸子[の日]に卜し、再び問う。尪父(キ7。卜人の名)が卜すか)という卜人の記述が、何ほどかの寄与をしたのである。

三

さて、先に挙げた『鐵雲藏龜』⑤の「癸子卜厭問尪父卜」は、現在では下に示すように、次の十日間（即ち旬）に禍がないかどうかを占う「卜旬の辞」とされる。

■癸巳般貞旬亡禍・・・癸巳[の日]に卜し、般(ナ7。貞人の名)が貞(と)う。旬に禍は亡いか。

劉鶚は「問」（即ち貞）の前の一字「厭」（即ち般）を“再び”のように問い方を表わす字と解したわけであるが、この文字は現在では卜問を行う人すなわち貞人の名とされ、このような貞人名は数十にのぼる。その後、貞人は時代別にグループをなしていることが分り、これにより甲骨文片の時代区分への道が開かれたわけであるから、貞人の発見は甲骨学にとって期を画する大事件であったといえよう。この発見は先に紹介した董作賓氏の「大亀四版考釈」で初めて報告された。

そこで、この論文を読んでみたわけであるが、読後に一つの感想をもった。それは、先に触れたように貞人の発見は『鐵雲藏龜』（1903年）で言及された「癸子厭問尪父卜」（癸子の日に卜し、再び問う。尪父が卜すか）の卜人名「尪父」の記述にヒントを得ているのではなから

うかということである。以下、董氏の「大亀四版考釈」にそってその点を確認する。

四

董作賓氏の「大亀四版考釈」は同一箇所から発掘された4枚の亀版の文字について論じたものであり、そこには次のようにある。

従前研究契文者對於貞上之一字，有疑爲官名者，有疑爲地名者，有疑爲所貞之事類者，現在根據第4版，可以確定他是人名。因爲貞上一字如爲地名，則必有在字，如“在向貞，”“在漢貞”（殷虛書契考釋下五葉引），只言“某某卜某貞”者，決非地名。又4版全爲卜旬之辭，若爲卜貞事類，或職官之名，應全版一致，今卜旬之版，貞上一字不同者六，則非事與官可知。又可知其決爲卜問命龜之人，有時此人名甚似官名，則因古人多有以官爲名者。又卜辭多“某某卜王貞”及“王卜貞”之例，可知貞卜命龜之辭，有時王親爲之，有時使史臣爲之，其爲書貞卜的人名，則無足疑。（438頁）²

ここで言及された第4番目の亀版は、他の3種とはやや趣を異にする。この亀版には22の卜辭が刻されているが、全て「～～[の日]にトし、～が貞う。旬に禍は亡いか」という卜旬の辭であった。占う内容が全て同じであるにもかかわらず、貞の前には6つの異なる文字（𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎）が現れる。

董氏の論旨は次のようなことであろう。すなわち、同一内容であるからには、それについて6種の問い方をすることや、あるいは6種の官職名において問うことは不自然である。しかしながら、それを貞人名としたならば、その不自然さを解消し得るということである。この考えは「トして王が貞う」（“ト王貞”）などとする卜辭の存在によっても首肯し得るという。すなわち「王が貞う」というものが有るからには、「王」の部分に卜問を行う臣下すなわち貞人名がきても良からうということである。

五

同一亀版上の22の卜辭がすべて同一内容の“卜旬の辭”であること

² 文中に「殷虛書契考釋下五葉引」とあるが、手元の書によると「在某貞」という卜辭例は『殷虛書契考釋』では第九十一葉、『増訂殷虛書契考釋 下』では第三十二葉で確認することができる。

からみて、貞の前の6つの異なる文字は6種の問い方や6種の官職名を表現しているのではないとする董氏の考えは理解できる。その点は理解できるのであるが、論文438頁に示された内容のみから帰納して貞人名という結論を導き出すことは困難であろう。思うに、董氏の貞人の着想は理屈のみによるのではなく、第4版を見て直ちに把握したという部分があるのではなかろうか。私は、貞人発見の過程において劉鶚の序が何ほどの寄与をしたと考えるものである。

すなわち、劉鶚は、『鉄雲蔵龜』本文67葉第3片の拓本を、序文において「癸子厭問虺父ト」と読み、「虺父」を、ト問を掌る者の名とした³。ト人の名前がト辞中に見えることを明言しているのである。もっとも、劉鶚の「虺父ト」とする読みは誤りで、後に「旬亡禍」というト旬の辞であることがわかった。おもしろいことに、貞人の着想の契機となった「大亀四版考釈」の第4番目の亀版の内容はト旬の辞であり、かつて劉鶚が「虺父ト」と読んだものであった。しかも第4番目の亀版は、全面がト旬の辞のみで埋め尽くされたものであった。このト旬の辞を、かつて劉鶚がト人名を含むト辞として誤読したことは、甲骨文字の解読に携わるものであるならば誰しも承知しているところであろう。したがって、董作賓の第4の亀版と劉鶚のト辞^⑤は、ト旬の辞という点で繋がるのである。

もっとも私は、貞の前の1字と劉鶚のト人名が直接繋がると主張しているわけではない。これらのことが総合し連絡し合って貞人名の着想に至ったと考えたいのである。解読の転換点にはしばしばこのような飛躍の瞬間がある。

六

以上を要するに、1931年の董作賓「大亀四版考釈」でなされた貞人の発見には理屈のみでは解決し得ない“飛躍”の一瞬があったということである。これは帰納からではなく演繹から資料をながめる瞬間である。解読にあっては、これまでの研究の積み重ね、或いは思い込みを断ち切る僅かな飛躍が必要となる時がある。そしてその飛躍を支えたものは劉鶚の序文の記述、すなわちト人名の記述であったと私は想像する。そしてこの瞬間より、甲骨文字研究は大きく進むこととなっ

³ 「虺父當是掌ト者之名。故稱虺父ト者甚多。」

た。貞人はグループを為しており、そのグループと殷王を結びつけることにより甲骨文字資料を時代別に分けることができるようになったのである。

〈参考文献〉

- 董作賓 1931. 「大亀四版考釈」, 『国立中央研究院歴史語言研究所 專刊之一 安陽發掘報告』第三期, 423-441 頁。
- 吉池孝一 2007. 「甲骨文字の解説」, 『KOTONOHA』第 55 号, 12-18 頁。